新潟日報
2025年（令和7年）
6月20日
金曜日

異文化交流が発展の鍵

西三川「学校蔵」で特別授業

講師陣が異文化に触れる大切さなどを訴えた特別授業＝佐渡市西三川

佐渡市西三川の廃校を活用した酒蔵「学校蔵」で、恒例の特別授業が開かれた。「ウチとソト～混ざると変わるニッポンの未来」をテーマに、過去最多の5人の講師が登場。異文化に触れることが、家業や地域の発展につながることなどを語り合った。

学校蔵は尾畑酒造（真野新町）が借り受け、2014年に開設した。特別授業は地域住民らでつくる「佐渡地域力幸醸（こうじょう）委員会」が主催して14日に行われ、県内外から約70人が参加した。

日本総合研究所の藻谷浩介・主席研究員は、実際のデータとは異なりイメージで現状を捉える人が多く、社会が停滞していると指摘し、言語や文化、価値観が異なる人同士が混ざり合うことの大切さを強調した。

クラフトビールのCOEDO（コエド）ブルワリー（埼玉）社長の朝霧重治さん、うどんすきで知られる美々卯（大阪）社長の江口公浩さん、尾畑酒造社長の平島健さんの3人によるトークセッションでは、他業種から妻の実家の家業を継いだ「ムコ経営者」という共通項をもとに、経緯や苦難を赤裸々に語った。

江口さんは「価値観や世代も（先代たちと）違うので、外から来た方が気付きやすい」と、従来路線の切り替えが柔軟にできるメリットを強調。平島さんは、地域に根付いたファミリービジネスに外からの人も加わり、「共に地域社会を支え、発展につなげていきたい」と話した。

東京から参加した板倉真理さん(64)は「婿は継承するイメージが強かったが、新しい何かを生むきっかけにもなるということを再発見できた」と感心していた。